

## 永代橋

えいたいばし

現在、永代橋の下流には、中央大橋や佃大橋・勝鬨橋と3つの橋がかかる。しかし震災復興事業が完成した昭和初期には、永代橋の下流に橋はひとつもなく、永代橋が隅田川の第一橋梁であった。隅田川は、帝都を代表する河川であり、永代橋はそれにふさわしく「帝都の門」として造られた。

永代橋から下流をながめると、佃島から遠くの方までずっと見渡せる視界の開けた場所だった。ここからのながめは、「永代橋河口の眺望を第一とする」（『日和下駄』）と、永井荷風も折り紙をつけた。

このような「雄大なる環境に調和することは、区々たる局部的装飾の能くする処にあらず、橋梁其のものが全体として表現する気分によってのみ果さる」（『永代橋設計計算書稿』復興局）として、今日あるような豪壮雄大なる輪郭の形式が選ばれた。

第一橋梁の永代橋と第二橋梁の清洲橋は、対をなしてデザインされている。筋骨隆々とした男性美を想わせる永代橋に対して、チェーンで懸垂曲線を描く清洲橋（No.77）は女性的な橋である。帝都の入口は、このように対比的なデザインの橋で華麗に演出された。

橋の設計から施工・材料の供給まで、すべて自前でおこなったのが震災復興橋梁の特徴だが、唯一の例外があった。それは、軟弱地盤に橋の基礎を据え付けるニューマチック・ケーソン（潜函）工法の採用である。この工法は、水の浸透を防ぐため、作業室の中に圧縮空気を送り込んで基礎工事をおこなう。

技術の導入を決定したのは、復興局土木部長の太田圓三（医師であり、文学者の木下杢太郎の実兄）。間に立ったのが、後の白石基礎工事会社の創設者：白石多士良である。

ニューマチック・ケーソン工法は、古くは、横浜港の岸壁基礎工事（明治35～38年）や、朝鮮半島の付け根を流れる鴨緑江橋梁の基礎工事（同42～43年）に使われたことがある。

そのため、「今更なんで、外国人を招聘するのか。金もかかるではないか」と反対された。

これに対し太田圓三は次のように反論して、新技術の導入に踏みきった。「知識を学ぶのではない、技術を習うのだ。早く覚え咀嚼し、これを日本の技術として普及するのだ」。

確かに当時、施工技術はアメリカが進んでおり、手際のよさから、施工期間も短縮することができた。招聘した3人の人選もよかった。とくに、現場監督としてやってきた、クラフト、イングラダーが若い大学出であったことは、現場にいた日本の若い技術者達と意気投合した。監督技師のヒューズは、現場育ちのこの道のベテランであり、当時62歳。全体を上手にとり仕切った。彼らは、細部に至るまで実務的な技術を教えてくれた。万事、申し分なかった。

〔IT〕

竣工月日：大正15年12月

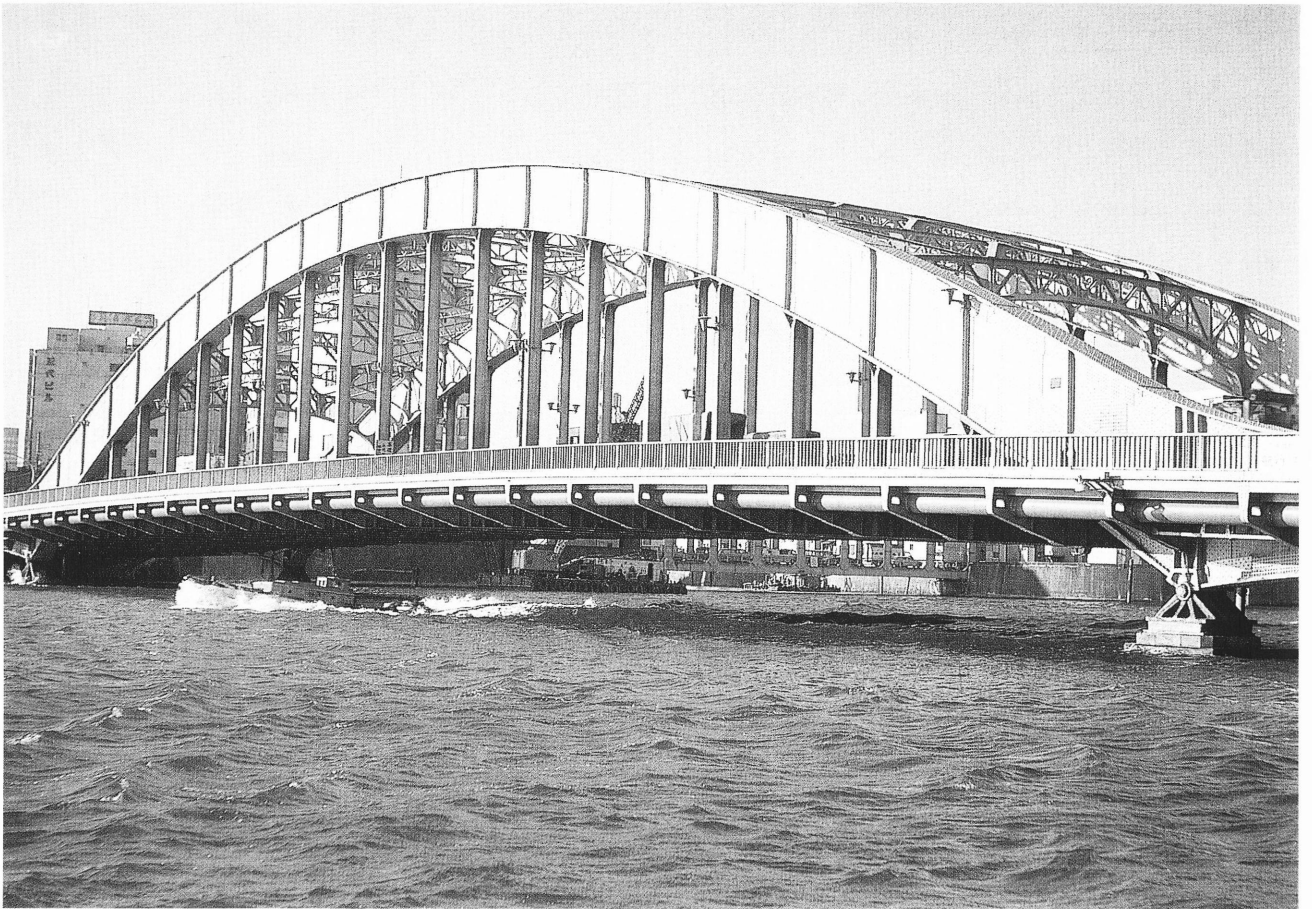
所在地：東京都中央区 - 江東区

河川名：隅田川

橋長・幅員：185.170m × 22.0m（車道16.60m + 歩道2 × 2.70m）

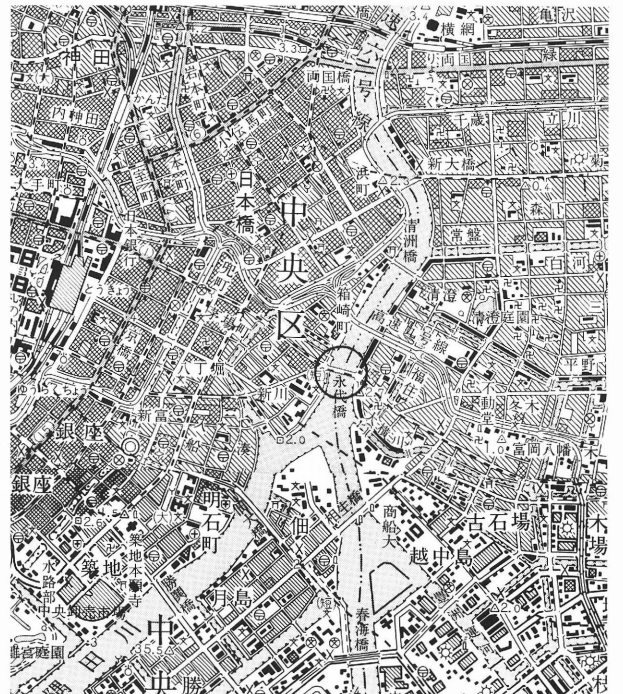
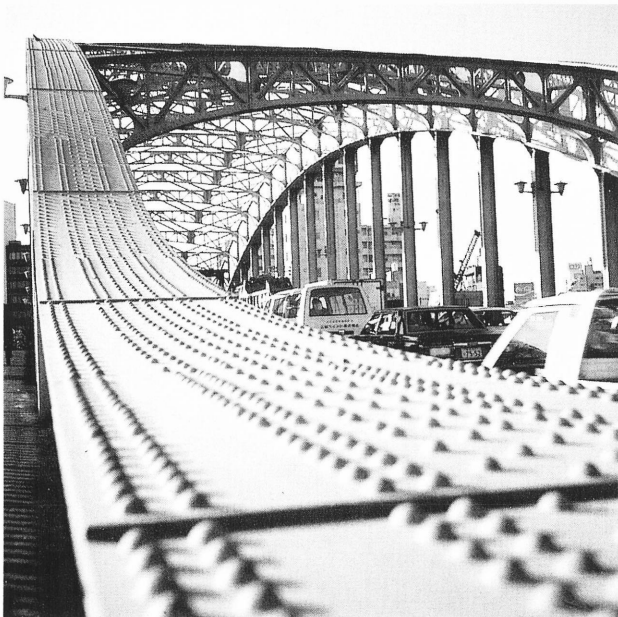
径間数・支間長：1 × 41.148m + 1 × 100.584m + 1 × 41.148m

形式：下路バランスドタイプアーチ



ライトアップ用の灯具が取り付けられる前の写真。

〈1984年1月，撮影・共に成瀬輝男〉



(1:50,000 東京東北部，東京東南部)